

1 国語科における子どもに備えさせたい資質・能力

子どもたちは、この学校園で過ごす11年間に多くの語彙を獲得し、それらを使って必要な情報を得たり、伝えたいことを相手に伝えたりすることを通して、言葉の力を身に付けていく。また、言葉を使って周りの人々に表す思いや考えも、発達段階に応じてほしいに複雑なものになっていく。言葉は子どもたちにとって重要なコミュニケーションの手段であり、一方で、自分の思いを形にしていくという思考の手段でもある。

子どもたちが今後、一人の社会人として21世紀を生き抜くには、物事を自分でとらえ、追求し、意思決定していくことや、さまざまな問題を他者と協力して解決していくことが必要不可欠となる。そのためには、単なる知識・技能として言葉を獲得するだけではなく、自分の思考をより広げ深めること、そして思考したことを目的や相手に応じて適切に表出できる、主体的な言葉の使い手になることが望まれる。

そして、表出した思考の内容を相互に交流する場面を経験すると、子どもたちは「自分の考えが広がった」「今までとは考えが変わった」、あるいは「考えたことが自分の力になった」などの思いをもつだろう。それは、自己の思考や価値観の高まりの自覚であり、すなわち、言葉を通じて思考する価値の実感であると考えられる。

本学校園国語科では、こうした思考する価値の自覚によって、主体的な学びへの意欲を喚起し、言葉の力を高めていくことを目指している。その一方で、国語科で育てるべき言葉の力には、思考や他者とのコミュニケーションの場面において、他教科の学びを支える基礎的な力となることも求められている。そこで、思考力を核とした以下の5つを備えさせたい資質・能力の重点項目として掲げる。

- ・ 思考力…その場に応じて論理的、あるいは創造的に考えることを通して、自らの思考を広げ深めていく力。
- ・ 活用力…学んだことや思考したことを、新たな学びへとつなげて活かす力。
- ・ コミュニケーション力…思考したことを他者に伝えるために必要な、日常および社会生活における人との関わりを支える力。
- ・ 相手意識…自分の思考をよりよく伝えるために、相手の状況に応じて自分の言動を調整していく力。
- ・ メタ認知…自分の状況を客観的に捉え、課題やよさを見いだし思考につなげる力。

2 資質・能力を育むために

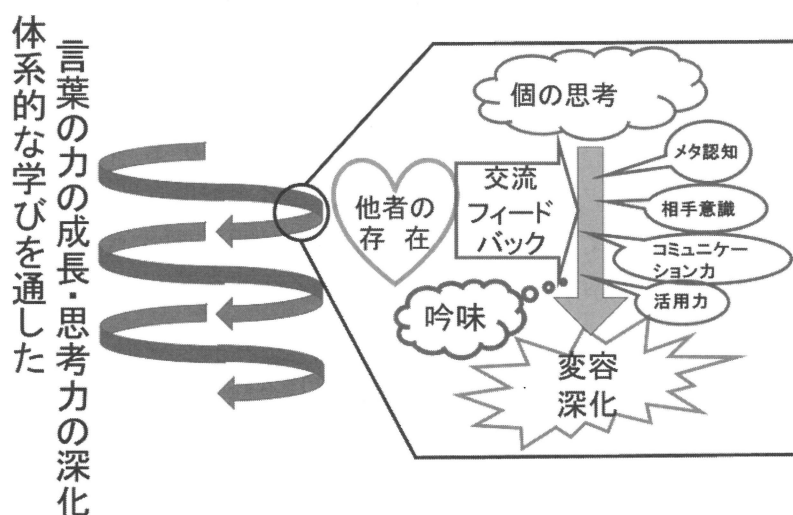
(1) 思考の必然性を実感させる単元構成の工夫

子どもたちが思考する価値を実感するには、思考した内容を他者に表現していく経験を積み重ねる必要があると考えている。それにより、自分の思考が他者に伝わることの楽しさを知り、他者の思考について知ることが自分の思考をさらに変容させ磨いていくプロセスを味わうこと

ができるからである。そのような経験を積むために最も重要なのが、教師による単元構成の工夫である。言語活動だけではなく、子どもたちが思考したい、思考しなければならない、と感じる場を単元の中に意図的に設定することが重要である。

具体的には、問いを生み出す学習材との出会わせ方、思考の活発な交流を生み出す対話的な学習活動の設定、目的意識や相手意識の高まりを促す場面の設定、子どもたちの思考の手助けとなるツールや指針の提示、子どもたちのふりかえりを新たな学習材として活用する等、さまざまな手立てが挙げられる。こうした工夫を単元の随所に盛り込むことで、子どもたちが主体的に学習課題を吟味し思考を展開していくことを目指したい。

なお、国語科の学習内容の多くは、基本的にスパイラルな構造を取っている。子どもたちが言葉の力の伸びを自ら確認し、思考する価値を一層実感できるよう、発達段階と学習の系統性を意識しながら、過去の単元や学習材で学んだことを活用できる場面を意図的に設定していくことも大切である。



(2) 共通言語化による思考の共有

共通言語化とは、固定化された学習用語とは異なり、子どもが表現した個々の言葉を教師が共通の言葉を用いて整理し、思考を共有できるようにするはたらきかけである。例えば、「読むこと」の領域では、個々が習得している語彙を用いて自己の読みを書いたり語ったりするが、それを整理し定義づけることで、互いの思考がスムーズに共有されることになる。こうした共通言語化を適切に行うことで、共有された子どもたちの思考がさらなる深まりにつながっていくことを目指したい。

(3) 思考の深まりを生み出すふりかえりの工夫

ふりかえりについては、従来ともすると型にはまった画一的なものになりやすい面があった。そこで、思考の深まりを促すという意味から、ふりかえりの在り方も問い直していきたい。まず、ふりかえりの視点を明確に示すことで、その時点での思考を子どもが真摯に見つめ直し、個々の思考を深める契機としたい。また、授業の導入時にあらかじめ示す、あるいは授業の最後に授業内容を踏まえて示すなど、視点の提示の仕方も授業の内容に応じて工夫していきたい。加えて、フィードバックによる新たな学習材としての活用など、授業自体をさらに思考の深まりを促すものにしていくようなふりかえりの活用の仕方についても検討していきたい。

(文責 籠橋 剛)